男が男に惚れた
～二つの永井隆記念館①～

長崎市の永井隆記念館を訪れた時、ふと島根県雲南市三刀屋（みとや）にもある永井隆記念館を思い出した。

下松カトリック教会の敷地内に韓国の女子修道院がある。日本のイエズス会の要請を受け、テグ（大邱）の李大司教の決断で来日が実現したもので、シスターは幼稚園での宗教教育が主な仕事である。

韓国第三の都市、テグは人口約二百五十万人。ソウル、釜山に次ぐ大都市だ。李大司教の父上が国会議長の時、広島平和公園に「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」が建立された。碑の文字は父上が書いたものだ。

李大司教とは一九八四年に台湾で開かれたアジア司教会議で初めて会った。当時は司教で、言葉を交わすこともなかったが、派遣されて来たシスターが、我が家のアルバムの中に大司教を見つけ、二〇〇〇年にその写真を持ってテグを訪問して親しくなった。

大の親日家で、永井隆博士の『長崎の鐘』などを読まれ、深い感銘を受けられた。「男が男に惚れたよ」と言われ、永井博士を一人でも多くの韓国の人たちに知ってもらおうと『愛の歌・平和の歌～永井隆の生涯』という本を出版された。日本語版もある。

永井隆は明治四十一年、島根県松江に生まれ、幼少の十年間を三刀屋で過ごした。長崎医科大学（現・長崎大学医学部）で学び、放射線医師となる。二十六歳の時、カトリックの洗礼を受ける。

昭和二十年八月、長崎に落とされた原爆で被爆するが、それより二カ月前に仕事による放射線で白血病と診断され「余命三年」と言われた。原爆被爆後も被爆者の救済に我が身を忘れて奔走し、そのかたわら『長崎の鐘』『ロザリオの鎖』『この子を残して』『乙女峠』などのたくさんの本を書いた。

昭和二十六年、四十三歳の若さで逝去したが、妻を原爆で失い、二人の子供とともに二畳の「如己堂」で過ごしたことはあまりに有名である。

現在、長崎と三刀屋に永井隆記念館が建てられ、博士の業績を顕彰するために長崎如己の会と三刀屋如己の会が結成されている。

李大司教は韓国にも如己の会を結成され、現在会員は三百人。会員とともに度々巡礼に来日される。三刀屋は島根県でも最も長崎から遠い出雲市の近くにあるが、毎回、三刀屋永井隆記念館を訪問される。

実は大司教から言われるまで私は三刀屋という地名すら知らなかった。韓国の人たちがわざわざ訪問されるのに、日本人の、しかも隣県の山口県に住みながら一度も三刀屋を訪れたことがないことに恥ずかしさを感じていた。

そこで、広島と長崎に原爆が落とされた日に近い先日、昨年、上五島巡礼に一緒に出掛けた友人夫婦と四人で三刀屋を訪れた。

朝七時に下松を出発し、中国道三次インターから国道54号を松江方面に向かう。走ること約四時間、隣県といえどやはり遠い。外国人のカトリックの大司教をして「男が男に惚れた」と言わしめた永井隆博士。私たち日本人、とりわけ日本のカトリックは博士をどれだけ大切にしているだろうか。

そんなことを考えているうちにやっと三刀屋に着き、名原館長の温かい歓迎を受けたのである。

李大司教が書いた「永井隆の生涯」

名原館長（右）と三刀屋の記念館前で